

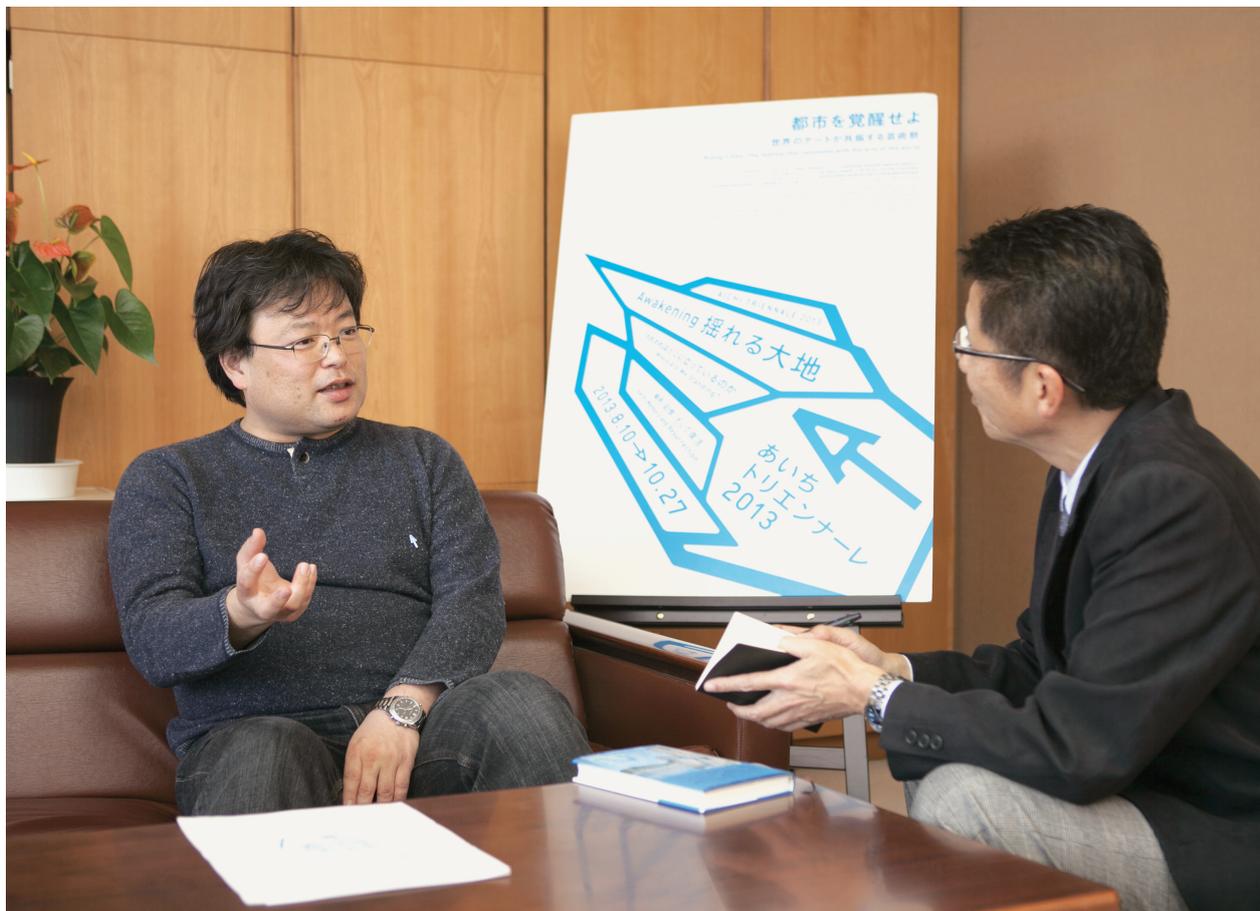
高井一の

# 中部に活!

インタビュー 高井 一 (東海テレビアナウンサー)

東北大学大学院工学研究科 教授

## 五十嵐 太郎 氏



### 「近過去」に眠る地域の資産を掘り起こしたい

#### 音楽を通して知った 建築という表現行為の面白さ

**高井** パリで生まれ、5歳まで過ごされたそうですね。現在、ご専門の建築関係だけでなく、国際的な芸術祭の企画や責任者としても活躍の場を広げておられることを考えると、パリでの幼少期の経験が影響しているのでしょうか？

**五十嵐** パリにいたからという流れだとカッコいいなと思いますが、それはないと思います。何しろ、僕はパリでの記憶がほとんどありませんから。

影響を受けたとすると、両親がともに東京藝術大学芸術学科を出た美術の研究者であったという環境でしょうね。父が美学、母が美術史の研究をされており、両親が研究のために留学した先のパリで生まれ、小学校に入る少し前に祖父母に預けられる形で日本に帰ってきて、高校まで金沢で過ごしました。家は美術関係の本であふれていましたし、母が家で美術の勉強をしている姿をいつも見ていましたから、そういう環境に影響を受けていたということはあるでしょうね。

**高井** だとすると、一つ疑問が。大学は東京大学

の理科一類へ進まれていますね。理科一類というのは工学部系で、建築学科を専攻されています。ご両親の影響を受けて美術の道へとならなかったのはどうしてですか。

**五十嵐** 今思えば、影響を受けていたからこそだと思いますが、当時、親への反抗心のようなものがあって、完全に文系であった両親とは真逆の理系に行こうと思ったのです。それに高校時代に得意だったのが数学、物理、英語で、なかでも数学の点数が良かったのです。そこで、自分は数学の天才ではないかと思ってしまったわけです(笑)。東京大学は2年生の後半から専門課程が始まるため、入学時には具体的な専攻を決めなくてもよく、とにかく数学がやりたいということで選びました。もっとも、入学早々に僕の数学ができるというレベルは大したことではないことに気づかされ、数学の道は早々とあきらめることになるわけですが。

**高井** そういう流れの中で建築を選択されたのは？

**五十嵐** 数学の道をあきらめた時、工学部の中で何に関心があるかと自問自答したら、美術にいちばん近い建築が浮かび上がってきたということです。気がついたら、やはり親の背中を見ていた自分がいたということなのでしょう。

それともう一つ、大学に入ってすぐにハードロック系のバンドを始め、夢中になってやっていました。実はそれが建築を専攻した後、建築の道により引き寄せられる大きなきっかけになったのです。

**高井** バンド活動が建築を？

**五十嵐** 意外に思われますよね。一般的に映画や音楽は「楽しむ」という分類に入り、建築はそういうイメージを持たれていません。しかし、「もの」ができ、それに対してどう思うかということを見ると、映画も音楽も建築も実は変わらない。僕は、まずは音楽で「もの」を表現する喜びを知り、その表現方法について考えたり、文章を書いたりする行為の面白さに目覚めたわけですが、建築を学び始めて、表現について考察する楽しさを味わえる点では、音楽と同じじゃないかと感じ、建築の面白さにはまっていったのです。建築物というのは、単なる技術の塊ではなく、社会だとか

美術だとか、いろいろな複雑な要素が混ざり合っていてできている。多くの人が自分の好きな音楽を聴いて、これはどういったことなんだろうと考えるように、建築も同じように考えることができるものなのです。根っこは本来同じなのだということから、僕の建築の道はスタートしました。

## アニメの中に見た つくり方の一つの方法論

**高井** なるほど。そんな先生の経歴を拝見して興味をそられるのが、専門の建築関連の他に、アニメの『エヴァンゲリオン』についての考察本や『ヤンキー文化論』といった本も執筆されていることですが、関心を持たれている範囲が非常に幅広いのですね。

**五十嵐** 大学院生の時に最初のエヴァンゲリオンのシリーズが登場し、面白いという評判だったので見ていました。しばらくしてエヴァンゲリオンブームが起きるなか、多くの人の関心事は物語の中に散りばめられている数々の謎をどう解釈するかということにあり、それに関する本は多数出版されました。しかし、僕の関心事はそれとは違い、圧倒的に新しいアニメの表現手法に心が躍ったのです。作品のつくり方が時代とも合っていたし、日本のアニメの歴史を振り返った時に、ある一つの到達点になっていた。そのスタイル、そのつくり方の方法論に興味を抱いたのです。「『もの』をつくる」という視点に立つと、あの時点においてはたぶん突出して先端的で、学ぶべきことが非常に多い作品だと感じました。そこで、謎解きからは離れて、いろいろな人が強度のある作品をどう批評しているかというアンソロジー(※1)を集めて書いたのが『エヴァンゲリオン快樂原則』です。すでに大学院のころから建築についての評論文は書き始めていたのですが、これが背表紙に自分の名前が載った最初の本になりました。

(※1) 共通のテーマで集められた、複数人の文章によって構成された本のこと。

## 東日本大震災が われわれに突きつけたもの

**高井** その後、ご専門の建築関係の本も多数出版され、最新刊が『被災地を歩きながら考えたこと』ですね。東日本大震災後、各地の被災状況をご自身で見て回られ、震災後半年間の推移と展望を「震災と建築」の視点からつづられたルポルタージュですが、その本を書かれてから1年ほどが経ちました。現在、先生のなかにある、あの震災を経ての思いをお聞かせいただけますか。

**五十嵐** 思いとしては実にさまざまなものがありますが、特に衝撃的な事実として突きつけられたと思うことは、大きく挙げて三つあります。一つめは、「工学的な考え方が通用しないとき、どうすべきか」ということ。日本は世界有数の地震国ですから、耐震についてはずっと研究され、対策がとられてきました。実際、あれだけの巨大地震であったにもかかわらず、仙台の中心部においての物的被害が少ないことなどを考えると、その成果は評価できると思います。それよりも今回の震災は、みなさんがご存じのように、津波の威力が圧倒的だったのです。では、その津波に関して、今までどのような対策をとってきたかということ、堤防や防波堤、消波ブロックなど、いわゆる土木構築物で完全にブロックするということでした。そのために、背後にある建築物は極端に言えば耐震さえできていれば、ほかは何の対策をしなくてもいいというくらいしか、考えていなかった。基本的に土木と建築の関係性が間違っていたとは思いません。ただ、今回の津波は想像をはるかに越えるほどの大きさだったのです。本にも書きましたが、例えば紙相撲で台をとんとん叩くのが地震の揺れだとすれば、津波は横から直接紙の力士を手で押すような別のタイプの衝撃です。加えて奥が狭まるリアス式海岸の地形が水の威力を増し、金属の塊である車や船が凶器となって家屋に激突したわけです。そのような津波に耐える建物をつくるのは不可能ではないかもしれませんが、現実問題として採算は全く合わない。ならば土木をもっ



岩手県田老町の壊れた防波堤

と強固なものにすればいいかというと、どんなにすごいスーパー堤防をつくっても100年経てば劣化するでしょう。1,000年に一度といわれるような津波が来るまで100年で劣化するようなものをあと10回作り直すというのは、日本全体を考えるとあり得ないだろうと思います。要は、工学でまちを救えないことが起こりうる、それを肝に銘じたうえで、われわれはどうすべきなのかにしっかりと目を向けなければいけません。

**高井** 例えば、どのようなことが考えられますか？

**五十嵐** 私は、これを契機にいろいろなことが変わったほうがいいと思っています。例えば、津波に襲われる可能性が高い地域においては、そこには住まないという選択肢もあるでしょう。事実、そういう選択をし、高台に移転した地域もあります。それでもそこに住むという選択をした場合、土地を購入して木造の戸建て住宅を建てるのではなく、国の借地として強い構造の賃貸マンションなど集合住宅地域として整備することを考えてもいいと思います。もちろん、ハードの問題だけでなく、津波が起きた時「どう避難するのか」を徹底的に考えることも非常に重要です。

## 「記憶のあるまち」をつくることの 重要性

**高井** ある意味、非常に根本的なことに取り組む必要性ですね。

**五十嵐** そうです。そして、それを考えるうえで

大切なキーワードが「記憶」だと思うのです。「場所が持つ記憶」と言ったほうがいいのかもありません。これは、今回、とくに強く考えさせられたテーマの二つめでもあります。東北大学に勤務している関係で、気仙沼、大船渡、石巻といった今回大きな被害に見舞われた地域には、東日本大震災前にもたびたびゼミ旅行などで訪れていました。その時は、海に面したまちという特徴は感じていたものの、かつてそこが繰り返す津波に襲われたまちであるとか、津波に襲われる可能性があるということに関心を持ったことはありませんでした。「高台に逃げろ」というサインを見た記憶はあるし、頭の片隅に津波に襲われたまちだという知識はありましたが、建物も、先ほどお話ししたように土木で守られるという考え方のもと、例えば東京の内陸部に建っているのと同じような家などが建っていましたから。震災後に、そんな震災前のまちはどうだったんだろうと振り返った時、「そうか、そもそもまちに津波に襲われたという記憶が残っていなかったんだ」ということに気づき、非常に大きな衝撃を受けたのです。

**高井** 先生が本のなかで取り上げておられる、いくつかの倒壊ビルを残すべきだという意見は、それゆえですね。

**五十嵐** 被災者の方々にとっては、二度と見たくない、思い出したくもない記憶だということは、もちろんわかっています。それでもなお、私は確信を持って残すべきだと考えています。被災地はどこも大変な状況でしたが、なかでも宮城県の女川町での光景には言葉を失いました。4階建ての鉄筋コンクリート造りや鉄骨造りのビルがまさにゴロゴロと転がっている。建物自体はその姿を留めたままで。しかも、隣に倒れたわけではなく、水の力によって大きく場所を移動している。こんなことが本当に起こるのかと我が目を疑いました。これは大袈裟でもなんでもなく、イタリアのポンペイや「9.11」のグランドゼロなどと同じような意味を持って残すべき世界的な悲劇の現場だと思うのです。いくら多くの映像情報が残されるといっても、リアルなものの記憶に勝るものはあり

ません。今生きている自分達にはではなく、まだ生まれていない未来の子供たちのために、また記憶のないまちをつくってはいけない。これが今を生きるわれわれに課せられた使命だと思っています。



宮城県女川町の横倒しになったビル

## 震災復興に声がかからない 建築家サイドの反省

**高井** 衝撃的な事実の三つめは何でしょうか？

**五十嵐** 「場所の記憶」ということに関係するのですが、場所が違ったら、それぞれに合わせた違うものづくり方があってしかるべきです。そこにもっとも力を発揮できるのが建築家です。本来、建築家が持っている能力というのは、場所や空間をていねいに読み解くことですから。しかし、東日本大震災の復興計画に際して、建築家はあまり声をかけてもらっていません。

**高井** それはどうしてですか？

**五十嵐** いろいろな要因があると思いますが、日本において建築家が社会や都市について積極的に提言をしてこなかったという背景があると思います。日本でも1960年代に「メタボリズム」という前衛的な建築運動が起こりました。それは、建築や都市構想も、社会や環境の変化に合わせて変化していくべきであるという思想で、その代表格が愛知県出身の黒川紀章さんです。彼は亡くなるまで都市への提言を続けた人なのですが、実は彼のような存在は日本の一般的な建築家の中では例外的なのです。その後、高度経済成長のなか高層ビ

ルが立ち始め、ニュータウンづくりが始まり、建築家が都市や社会のことを言っても受け入れられないという現実のなかで、社会やまちづくりへの発信はあまり行わず、個々の建物をクオリティ高くつくる方向へ向かったのです。その方向性のなかで、日本の著名な建築家の多くは、世界的に高い評価を勝ち取り、国内より世界からのオファーが多いという状態にさえなっています。そして彼らは、海外ではまちづくりに近いことも頼まれてやっていたりするので。だから、東日本大震災後、建築家は何とかその復興に力を注ぎたいと考えていたのですが、全く蚊帳の外という状態が起こったわけです。その現実のなかで、「われわれ建築家サイドも怠っていた」ということを反省し、どうやって信頼回復しようかということを一所懸命考え、積極的に取り組んでいます。

## 東日本大震災後初となる 大型国際芸術祭 「あいちトリエンナーレ2013」

**高井** ニュースでは伝わってきませんでしたが、そういうことが起こっていたのですね。まだまだ東日本大震災の復興に関しては問題が山積している状態ですが、今後、建築家サイドが積極的に関わるなかで道が開けていくことをぜひ期待したいですね。

さて、今年、「あいちトリエンナーレ2013」が開催されます。これは、愛知県で開かれる3年に一度の国際芸術祭であり、2010年に続いて2回目となりますが、五十嵐先生は、前回、長者町企画コンペの選考委員を務められ、今回はすべてを総括する芸術監督に就任されました。「あいちトリエンナーレ2013」はどのようなものになるのでしょうか。

**五十嵐** 実はこの「あいちトリエンナーレ2013」は、今お話をしてきた東日本大震災後に日本で開催される大規模な国際展としては、初めてのものになります。正確にいうと、横浜トリエンナーレが震災直後にあったのですが、まさに直後だった

ので、震災前に決まっていた内容で開催されています。国際展というのは、国内はもとより海外から日本がどのようなことを考えているのかを見られる場でもあり、今回のあいちトリエンナーレでは、われわれはあの震災をどう考えどう未来へつなげていこうとしているのかということから目を逸らすことはできないだろうと考え、これを大きな背景に据えて、企画をスタートしました。そこから生まれたテーマが、「揺れる大地—われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」です。東日本大震災後のアートを意識しつつ、世界各地で起きている社会の変動と共振しながら、国内外の先端的な現代美術、ダンスや演劇などのパフォーマンスアーツ、オペラを紹介します。

**高井** 震災後のアートというのは、見せ方が非常に難しい気がしますが、具体的にはどのようなことが行われるのでしょうか？

**五十嵐** 今回のこととお話する前に、前回のあいちトリエンナーレ、さらにはその前段階として愛知芸術文化センターで開催された面白い企画から紹介すると分かり易いでしょうね。

あいちトリエンナーレは、都市とアートが響きあう3年に一度の国際芸術祭ということで、第1回のテーマは「都市の祝祭Arts and Cities」でした。新しい人工的な祭りなんですね。その一番の特徴は、美術館や劇場のみならず、アートがまちなかへ飛び出したことで、都市の日常風景のなかに魅惑的な光景を出現させたことです。アートが飛び出すまちなかの一つであったのが、名古屋市の中心部にある長者町という場所で、私はそこ



に展示する作品のコンペの審査を担当したわけ  
です。実は、2002年～2004年の3年間、中部大学で  
教えていたのですが、長者町に行ったのは、2010  
年のその時が初めてでした。

**高井** 長者町は繊維問屋街という特異な場所です  
から、用事がないと行きませんからね。

**五十嵐** おそらく多くの人がそうでしょうね。し  
かし、長者町というのは名古屋駅と栄の間という、  
実にいい場所にあって、もちろん展示された作品  
の良さもあったと思いますが、開催期間の最後の  
方では行列ができるなど、その大盛況ぶりに正直  
びっくりしました。そういう場所があることに気  
づいたことが、まず大きなポイントだったと思い  
ます。そして、美術館でない場所での展示という  
のは、アートを身近に感じられるということと  
ともに、アートを通していつもと違う都市の見え方、  
使い方が発見できるという点で、面白い取り組み  
だったと思います。

## 名古屋駅から栄を散歩して 愛知芸術文化センターにやってきた “ナナちゃん”

**高井** 前回のあいちトリエンナーレは、水玉模様  
のプリウスが走ったり、名古屋城から光のタワー  
が伸びたりという、非常に目を引く華やかな仕掛  
けが印象に残っていますが、一方でアートを通し  
た都市の再発見というところにも光が当てられて  
いたわけですね。

**五十嵐** アートにはすごいパワーがあるのです。  
ある意味、アートにしかできない可能性と言っ  
てもいいかもしれません。先ほど、前回のあいち  
トリエンナーレの前段として、ある面白い組み  
があったと触れましたが、それは2006年度から愛  
知芸術文化センターで実施されている「アーツ  
チャレンジ」(※2)という企画展です。若手の作家  
を公募で選び、愛知芸術文化センターの通常は作  
品を展示する場所ではない廊下や空いている場所  
などで作品を展示するものです。私は最初の年か  
ら3年間、その審査に関わったのですが、これが



新進アーティストの発見inあいち 飯田陽子「ナナちゃん物語」設置風景 (2007)  
愛知芸術文化センター

本当に面白かった。なかでも、今思い出しても心  
が踊るのが、1年めに選ばれた「ナナちゃん物語」  
という作品です。

**高井** 「ナナちゃん」とは、名古屋の人なら誰も  
が知る名鉄百貨店ヤング館（旧セブン館）前に  
1973年から設置されている巨大マネキン人形のこ  
とですね。確か、2007年でしたか、愛知芸術文化  
センターに特別展示され大きな話題になったこと  
がありますが、その経緯は、若手作家による企画  
だったのですか。

**五十嵐** そうです。美術作家の飯田陽子さんによ  
る企画作品です。ナナちゃんは設置以来、一度も  
あの場所から動いたことがありませんでした。彼  
女は、「そんなナナちゃんが栄にお散歩に来たら  
楽しいよね」というプロジェクトをストーリーボー  
ド（絵コンテ）に書いて応募してきたのです。正  
直、審査員だった私は実現は難しいと思いましたが、  
この案を推しました。実現しなくても、その  
ストーリーボードを見るだけで非常に楽しく、想

(※2) 愛知県にゆかりのある若手アーティストが展示や  
公演を行うイベント「新進アーティストの発見inあい  
ち」として始まった愛知芸術文化センターの企画展。  
現在は「アーツ・チャレンジ」と名称を変え、若手芸  
術家に活動の場を提供することにより、将来、トリ  
エンナーレを始め、全国や世界で活躍する芸術家を愛  
知から輩出することを目指して実施している。

像力がどんどん掻き立てられるからです。仮に実現しなくてもその交渉のプロセスを展示すれば、十分作品として成立すると思って選んだら、なんと本当に実現したのです。たまたま名鉄百貨店セブン館のリニューアルなどで一時的にナナちゃんが撤去される時期であったことなど、いくつかの偶然が重なった結果ですが、ナナちゃんは本当に愛知芸術文化センターにやってきたのです。おそらく、「こんなこと、考えるだけで楽しい」と彼女の想像力に共感していただけたから、貸していただけたのでしょう。想像力というのは、時に一点突破のパワーを発揮するのですね。「アートって素晴らしいな」と心から思った、多くのメディアがとりあげた印象的な作品でした。

## 芸術は、人類が生み出した最強の記憶装置

**高井** 名古屋は文化不毛地帯だなどと言われますが、実は、チャレンジ精神あふれた作家を見出す取り組みをいろいろとやっているのですね。

**五十嵐** そうです。僕は、あいちトリエンナーレはそういったなかから生まれたものだと思います。今回の「あいちトリエンナーレ2013」は、それを継承しつつ、東日本大震災で分かった「場所が違えば、起きていることや起きることが違う」ということ、「その記憶をまちにどう残すのか、持たせるのか」ということをテーマに、さまざまなプログラムを組もうとしています。

**高井** もう少し具体的にいうと、どういうことでしょうか？

**五十嵐** 作品面からいうと、直接的に東日本大震災に関するテーマを扱う作家を一部選んだということもありますが、震災の記憶とは関係がないけれども、「記憶」をテーマにした作品を展開している、あるいは場所と人との繋がりのカギとなる「場所性」(※3)を発見するという視点で選んだ

(※3) 地域ごとに独特な意味をもち、ほかと区別される唯一無二の価値がある場所のこと。

作家もあります。作家の半分は海外からの参加で、それぞれの国にも、価値観が大きく変わる出来事や社会的な変動がありますから、そういったものを作品に反映してもらうことが、その国や地域にとっての大切な記憶になりますから。

**高井** 「あいちトリエンナーレ2013」のパンフレットに「芸術は巨大な記憶装置だ」と書かれているのはそういうことですね。

**五十嵐** 結局、一番長く記憶を伝えるメディアの一つが芸術作品なのです。例えば、われわれが博物館に行って500年前、1000年前の人がどんな暮らしをしていたのかを知るのには、その時代の美術品や工芸品からです。ラスコーやアルタミラの壁画、あれがアートかどうかは本当のところわかりませんが、今ある枠組みでは美術の始まりと捉えられていて、文字がなかった先史時代のものとして、ああいうものが残っていたからこそ、その時代の人はこんなことを考えたのではないかということ想像することができるわけです。また、こういうことも言えると思います。「記録」と「記憶」は違い、記録というのは客観的な数字やデータで、例えば、東京大空襲で一晩に10万人の方が亡くなったというのは記録ですが、その事実美術的な表現を介在させると、ただの数字であったり過去の他人事であったりすることが、共感を持って、あるいはもっと強いイメージを持って入ってくる。一方で、これは私だけかもしれませんが、教科書に書いてあることは記録に近くて、だからすんなり頭に入って来ない(笑)。

**高井** なるほど、それは私も同感ですね。要は、記憶というのは心に波風を立てることであり、だから忘れにくいということなのでしょうね。

## 名古屋から世界へ広がった ルイ・ヴィトンショップのスタイル

**高井** では、今回のプログラムの特徴としてはどういふものがあるのでしょうか？

**五十嵐** 特に前回から一歩進めた取り組みが、アートというフィルターを通して都市を見るなかに、

美術だけでなく「建築」という視点も取り入れたことです。私が芸術監督に選ばれた理由の一つはそれを求められたからだだと思いますので、アーティストとして建築的な視点を持った人も選んでいますし、前回、出品作家に建築家はほとんど入っていませんでしたが、今回はすでに数組が入っており、最終的にはもう少し増えると思います。2013年に新しく始めるプログラムが、オープンアーキテクチャ（建物公開）です。普段は入れない建物に入れたり、地域の建築ガイド的な本をトリエンナーレに合わせてつくり、ガイド付き建物探訪を行ったりするプログラムです。建物というのは、美術品と違って普段は当たり前だと思って通り過ぎることが多い存在です。しかし、実はこういう意味があるとか、こうやって見ると面白いし楽しいということを知ると、とたんに生きた資産になるのです。

**高井** 例えば、どのような建物が紹介されるのでしょうか。

**五十嵐** 名古屋には、一般的にはその価値が知られておらずもったいないなと思っている建物が、実はそこかしこにあります。例えば、今回のあいちトリエンナーレで作家として入っている青木淳さんという建築家が設計した栄地区のルイ・ヴィトンショップ。ルイ・ヴィトンが日本で独立路面店をつくったのはあそこが初めてで、そのことについてはご存知の方もいらっしゃると思いますが、実はこれが非常に実験的なプロジェクトだったのです。店内はルイ・ヴィトン専属のデザイナーがやるため、外部の建築家がデザインできるのは外側だけなのですが、そこで青木さんが試みたのは、ダミエ・キャンバスと呼ばれるルイ・ヴィトンのパターンをガラス面にチェック模様でプリントし、その奥の壁にも同じくチェックパターンを施し、その両者によってモワレ現象を起こすというものです。モワレというのは、干渉縞とも言われるもので、規則正しい繰り返し模様を複数重ね合わせた時に、それらの周期のズレによって視覚的に発生する縞模様のことです。人が動くとき映像的な効果を発揮し、人の目には動画のように映るのです。



ヴェネチアのルイ・ヴィトン（青木スタイル）

奥行きが取れないことを逆手に取った表現で、興味深い設計をしたのです。そしてこのスタイルが今、世界各地のルイ・ヴィトン店で広がっています。私自身、ベネチアやドバイ、香港、シンガポール、ソウルでも見ました。ある意味、現在のルイ・ヴィトンショップのスタイルをつくった起源が名古屋にあるわけです。一般にはほとんど知られていませんが、これはまさに現代建築を知るうえで非常に価値ある一つの実例なのです。

## 近過去に見る名古屋圏の魅力

**高井** 今の一例を伺っただけで、建物に対する興味ががぜん湧いてきますね。他にもいくつかご紹介ください。

**五十嵐** 名古屋市美術館と科学館からちょうど2ブロックぐらい北側にある「大栄ビルディング」という建物は、ポール・ルドルフというアメリカの建築家が設計したものです。彼は1960年代～1970年代の初めにアメリカでトップを走っていた建築家で、国内で唯一、彼の実作が名古屋にあるのです。また、豊田市にある豊田市美術館は、日本の中で一番美しい美術館だと思います。設計者の谷口吉生さんは、20世紀のもっとも権威のある美術館と言われるニューヨーク近代美術館を増築する



ポール・ルドルフが設計した大栄ビルヂング（写真中央）

際選ばれた建築家です。そのコンペにおいて審査員が豊田市美術館を見て決めたところがあったようで、これも愛知県が持っている世界に誇るべき施設だと思います。

**高井** 名古屋は、文化的に見て語れるストーリーがなかなかないとよく言われますが、実はそうでもないのですね。

**五十嵐** まちの文化的魅力は、古い歴史のなかにもみあるわけではありません。近過去にもそれはしっかりあります。私は、実は日本の都市の中で、20世紀後半の近過去に面白いものがたくさんある筆頭が名古屋だと思っています。今紹介したような単体の建物もそうですが、整然とした区画割りと広い道を備えた都市計画と建物が連動しているところが最大の魅力です。例えば、名古屋のテレビ塔は、高さという点では今はもうたいしたことはありませんが、都市計画のもとでつくられたため、セントラルパークという都心部の一大公園の中心軸に建ち、視線がずっと先まで通るようになっています。近年、リニューアルした科学館の巨大な球体（プラネタリウム部分）も、それほど高くないのに、道の突き当りにあるのでかなり遠くからも見えるのです。また、名古屋市美術館やオアシス21という名古屋都心のまん真ん中にある商業

施設は、名古屋城の方を向くように建てられている。こういったことは、ヨーロッパでは結構あるのですが日本ではほとんどありません。東京には個別に面白い建物はたくさんありますが、手前がどん詰まりになっていたりして通りと建物が有機的に結びついているところはほとんどありません。それが結びついている魅力、面白さが名古屋にはあるのです。これは、いわば都市景観という点から見て、実は高いポテンシャルを持った地域であるということで、今後、建物をリニューアルする際にも有効に活用できるでしょう。

さらに言うと、私はオアシス21がユニークだと思っています。その理由は、地下に広場がある点です。ヨーロッパの都市だと普通にある広場ですが、名古屋はその広場を地下につくったのです。この考え方が地下街が発達した名古屋らしくてとても面白いと思います。

## すでにある優れた資産への関心を醸成したい

**高井** 最後に、五十嵐先生ご自身の夢をお聞かせいただけませんか。

**五十嵐** すでにお話していることですが、普通の人々に建築に関心をもってもらえる道を開きたいですね。日本の建築というのは世界的に非常に高く評価されていて、建築の世界のノーベル賞といわれるプリッカー賞や芸術のオリンピックと言われるヴェネチア・ビエンナーレにおいて、日本の建築家がたくさん受賞しているのですが、残念ながら日本国内でそれを知る人は多くなく、この建物は誰が設計したかといったことも含めてその建築物の価値や魅力への関心が高くありません。これからもそれらを紹介する活動を積極的に行い、一般人が映画や音楽、美術を楽しむように、建築もいろいろと楽しめる世の中にしていくことが、夢であるとともに自分に課せられたミッションだと思っています。

実は、強い危機感もあります。先に紹介した1960年代に起こったメタボリズムという日本の建

築運動は、当時、世界の最先端の建築表現と思想だったのです。昨年、東京でもメタボリズム建築展が開催されましたが、日本国内の関心は非常に低いのが現実です。一方、フランスのポンピドゥー・センター（ジョルジュ・ポンピドゥー国立美術文化センター）をはじめとする海外の美術館はその価値に目を向けており、その辺の資料などを買いあさっています。このままでは、明治時代に浮世絵が二束三文で海外に流出したのと同じ状況にならないとも限りません。現在、金山（名古屋市）にある名古屋ボストン美術館で「ボストン美術館日本美術の至宝」展（2012年12月9日終了）をやっていますが、それらはアメリカのボストン美術館から貸し出されたものです。近過去においても世界に誇れる非常に優れたものが日本の建築にはあるのだということにもっと目を向け、その価値を資産として生かす道をとらなければいけないと思います。すでにあるものが



面白いと気づけば、それほどお金をかけずとも魅力を醸成していくことはできますから。

**高井** どの地域でも実はそうだったりするのかもしれないが、まさに灯台下暗しなのですね。自分の地域について実はよくわかっていないということに、今日、改めて気づかされました。自分の地域の良さを自ら発見していくきっかけとして、「あいちトリエンナーレ2013」をぜひ活用したいですね。本日はありがとうございました。

Profile

**五十嵐 太郎** (いがらし たらう)

- 1967年 フランス、パリ生まれ。
- 1989年 東京大学工学部建築学科卒業。
- 2000年 東京大学大学院博士「新宗教の空間 その理念と実践」で学位取得。博士（工学）。
- 2004年 中部大学工学部建築学科助教授。
- 2009年 東北大学大学院工学研究科・都市・建築学専攻教授。
- 2010年 東北大学大学院大学院SSD (Sendai School of Design) 教員。
- 2011年 あいちトリエンナーレ2013の芸術監督に就任。

著書に『被災地を歩きながら考えたこと』（みすず書房）、『現代建築家列伝』（河出書房新社）、『新編 新宗教と巨大建築』（筑摩書房）、『戦争と建築』（晶文社）、『現代建築に関する16章』（講談社）、『美しい都市・醜い都市』（中公新書）など多数。

ひと口メモ

見かたがわかれば、街がかわる……五十嵐先生にお会いした直後に、それを実感しました。

明治末期から戦前まで活躍した、名古屋の西洋建築の先駆者鈴木禎次の足跡を、研究者の案内で取材したのです。

禎次の代表作のひとつが、明治43年に設計した鶴舞公園の噴水塔と奏楽堂。噴水は高さ10mから水が八方に流れ落ち、立派な柱はローマの神殿のよう。ところが噴水池には庭石が配され、どこか和洋折衷。研究者によると、石を持ってきたのは欧州留学で見たトレビの泉が影響しているかも、とのこと。また奏楽堂では、よく見ると手摺に「青海波」「三つ巴」といった和の意匠が取り入れてありました。ともにルネサンス様式ながら解説を聞くと俄然、明治末という時代が香りはじめます。

また、名古屋栄の広小路通りに面した石造り風の元東海銀行貨幣資料館も禎次の設計。窓の飾りに禎次のイニシャル「T」が扎扎实り施されて

いるのを発見し、建築家の悪戯心にふれました。

五十嵐先生がおっしゃるように、目の付け所がわかると、建物が一挙に自分に近づき時代を語り始めます。これまで気にとめなかった建物が、街に楽しさ面白さを添えてくれるのがわかりました。トリエンナーレは、名古屋の街の新発見をたくさん提示してくれそうです。そして、もうひとつは、記憶装置としてのアートが、どの場所のどんな出来事をどう描くのか……今から「あいちトリエンナーレ2013」の壮大さに圧倒されています。

.....

**高井 一** (たかい はじめ)

東海テレビアナウンサー。1953年、京都府生まれ。同志社大学文学部新聞学科卒。1976年、東海テレビに入社。1997年、名古屋大学大学院多元数理科学研究科修了。現在、編成局アナウンス専門局長。

